



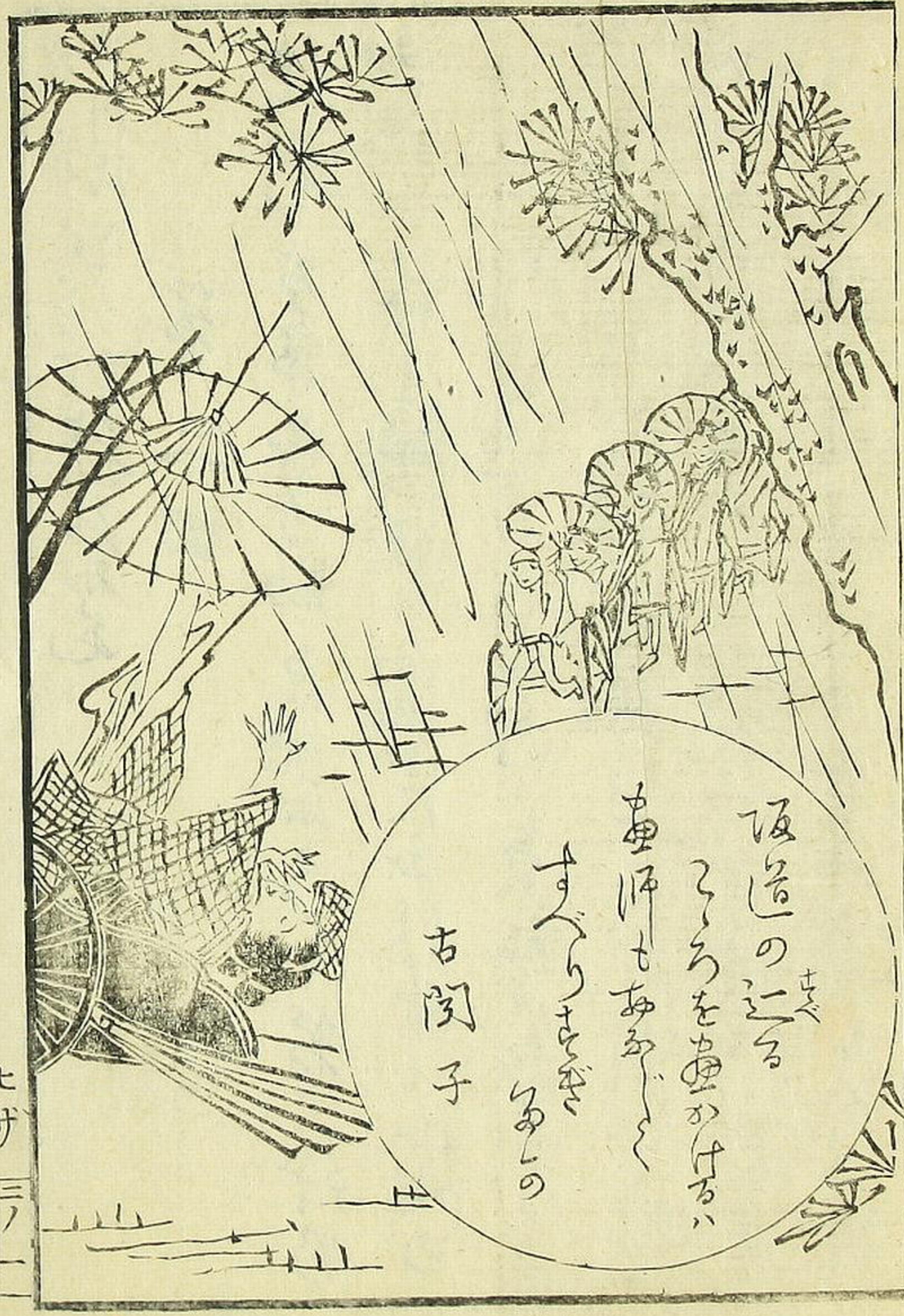
A790
25

猫 猫
空門語 笑終緒糸毛

第二回

徳利イを箱をり助させ^{いさな}ポカ〜第大陣乃
五徳^{ごとく}ふりけ〜緒^{いと}瓶^{びん}の白湯^{さや}に出^い糸^{いと}山吹^{やまぶき}の
色^{いろ}香^か煙^{えん}よき春^{はる}ごころ「ア、いゝ氣持^{きもち}どおま^ま〜
「ア、あそくおれだつて跡^{あと}を志^し〜つて往^い〜この
何^{なに}ん今^{いま}まゝ人の事^{こと}だから四方^{よかた}八方^{はつぱう}眼^めらとどかばて
の〜おる邊^へ〜と所^{ところ}があるともそりやア角^{かく}力の甚^し甚^し附^つて

48-2011



古関子

すゝめ

坂道の二つ
 こゝろをまわける
 車師もある

ヒサ
 三ノ一

まろしやう
まろしやう免を^{うら}るる^せ「^りく^そこ^で」^そこ
で^島崎^を出^離て^大平^山の^繩を^つり^ポロ^ク
降^出る^者の^{あり}」

降^るに^早あ^ひら^の橋^をて

どつこひ^生田^をま^るる^板ま^り

「^ハア^とど^つけ^の志^こづ^今志^やア^合辨[」]て
村^名が^智り^生田^でら^ねく^和合^とり^あぜ[」]ア^い
ほ^んふ^さう^だつ^いそれ^志や^アこ^らつ^も降^らふ

人^カ車^神馬^志や^まが^けり^をて

む^じきた^まも^余は^よん^をり

「^ヲヤ^ウふ^ハイ^芭蕉^の橋^く来^せ志^う今^の
狂^舟も^神る^志や^まと^い若[」]の^コリ^ヤア^生徒[」]
神^るさ^まの^けで^よから^ふ「^あら^ま娘^コイ^ッハ^忍入^る
悪^者も^も悪^の一^降あり^て」^ハン^どん^る物^ぞ
それ^よサ^神る^隣の^合辨^志の^いで^も島^村の^いな
そ^まら^う志^ねと^のい^おめ^しも^和合^ねせ

ダガらんたるりでも書くの時はおおやア合辨
 村名をどの徳べてきて世に作者は
 「そのやアさうもこれダガ今のおおー申に合辨
 くことなままでアイこがありやア合辨
 「何さ申て新以来何事も改て由と大
 お合ー纏を長く附一是を補ひ徳を助る
 ソコテ合辨といふは婦肌と合一たやうに
 ちとつらるとなり互ひに合かたなりて

ヒザ 三三

合ひ申國感をさす「分つてくさふ
 「よーおやアお合辨の合候がらう「ナニ出する
 物アリヤア合候「イヤ合辨ど「合辨でもか
 ども「こーて「ウニヤ纏お合辨合辨
 一辨おめがあんまり詞外を志あさるから
 大辨「て並べーサ「何外なるおやア
 散てあさるのよ其おめがの恥の恥の恥の玉の
 玉の恥の恥なくも 朝廷の法恥辱となるは

法蘭西をけがれといふので「威なり」といふはきやア
一書物やまのし指針物トヤアぬく者門松だとい
だロウテ中までチヨット数てまゝ一茶がありやれ今の先
合がたんとするまのしからハ強カ同心のる違だらふ
合カたんとする合防まがたんとするやうだ「ハ
さういふまゝトヤア何れもる違へる」さういふまゝ
何れもるまゝでまゝとく物さの「そいふとそれぞ菊の
十日の船まゝぬい松茸の皮で「何菊の十日れ船と

「ナゼく」「ナゼとて茶の十日の船といふ事があるのり
波の山空の船さ「波ぬい」末代の船よ「さうかまぬ
がらうちうの船人の山空山空にやア茶の九月
の九日に船屋してはむを用ひ高瀬浦ハ五月廿二日
ひ船こぎ「湯ふき」はなにある人茶の向の前日他家
みて茶を前屋「つれづれに船屋」茶にきく際
るるの者十日にぬいて茶の毛を括束りしうに人
報トてあつて茶の毛を括束りしうに人報トてあつて

あり我ちつやく歎くは佛に備ふる為たのて求
むる人多うもむに持歸り臨へしとふ佛の辨も
有しつる人あまに後悔せしと是より世々
何事も此の如し物十日の業といふなり
十日の業も日物ありといふれしものたる由に
甚だしうちがやうの場も遠くもよむの志もぬへる氣
十日の船といふのさしんたうもぬぬの松茸の灰
とりしつる焼松茸のつりサも松茸を焼のあも

大辨加減の有るを焼るなりヤア灰も成るかぬのも
いたとそ忘れてはあヤア後にヤアたぬをそそ焼ぬの松茸
の灰さしヤア松茸の灰の儀儀ありきくが甚も
未代の死さのまごう何るも志もぬるのいふべし
賢くも子にさく教られて浅敷を海らつるも
へん抱く女に欺されてあまの言ひもいふも
まごも君子の御言を詢るといつて去のあまも
山うつふも生たいたして苦へと宣ふありか

猫のまゝいぬれぬく朝よまを

御ふりきこも 綱へを又引出車れ上沖揚や
襦よまはりたるいやは香ひに 誰かも 陰痛汗光
メもり車まきよるも思ふまじり 祈い山中懐
ふあげさせ給へお天氣と 飲ふんを 生後平

ふあがる 魁 神カふりくまに

雨にまんきさるる 人カ

ハア何ぐるにむる 神カに人カあまのり ヒツカケるる

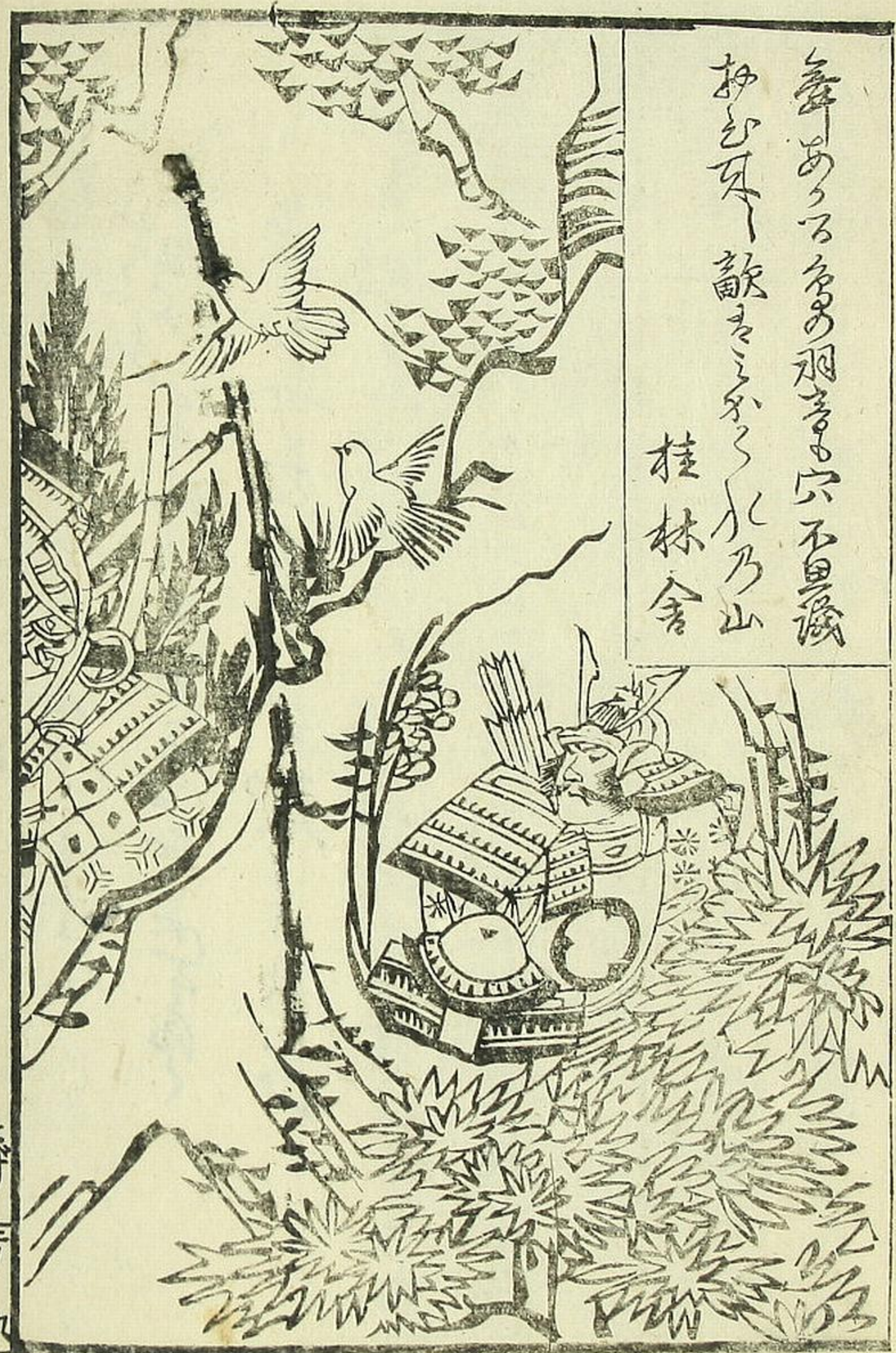
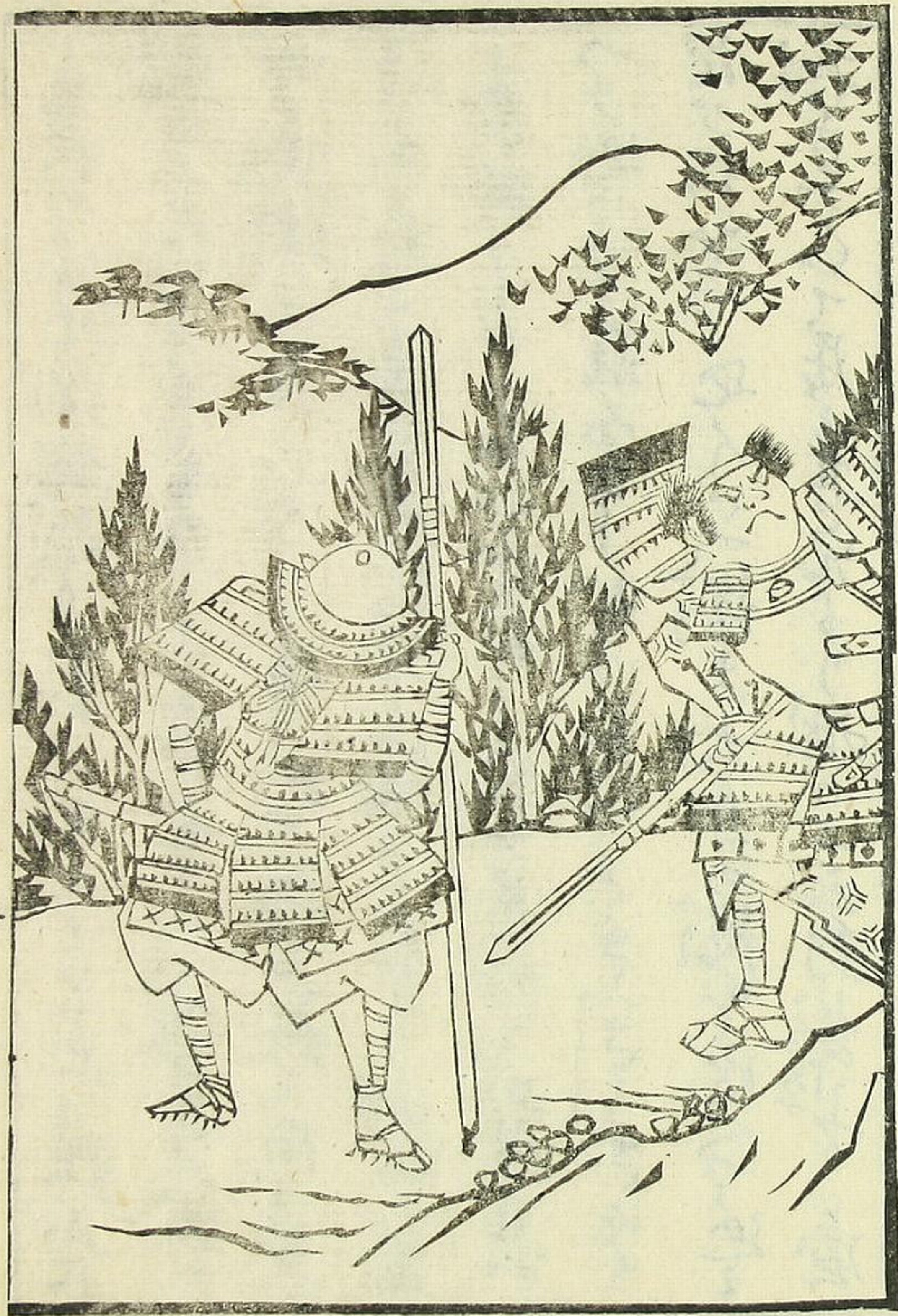
ヒツカケるる

やうだの「されをのそれとやアう〜

あつゝふり〜ひどしんを長そゆ

東も母も〜 名隠〜乃心

「コリヤア 総らふ」 姉ご〜 慈愛のうがま〜 うち
「〜」 だ「ト」 心みのよられらの 白濁よア 証証
もた〜」 遊 振げけ せんまも 眼を 覚る〜 くら
「ア」 急れ〜 何風呂妻志やア ね母衣交
だ〜むり〜 志る〜 大将が 故に 遊れて 後番者〜 なるり



舞あつる名羽子穴石目後
 抄むや、歌きふく水乃山
 桂林舎

るに東りて身辨極りのいかにせんと思ふに
窓を見附て是者ひとさやた合うと隠ひみ人の
如く大這ふ各々ゴソクと這ひては子か様を何と云
出もる故もなれ集ひつらふ鳴りあがら西風来
と我獲しやあるの山が窓を見附てお道具大
つはまや我あがらあうなうぐさ「さうさうさ
だう何をつてせんご「様子お身の強を定くつて
撥きふらして居る其元より捲ぐ二三羽舞上り上虚

窓をきいて飛り有柳穴の中ふらま後が目先
突出に強とカク尻ヒヤクして肝陰囊も緒あがり
一生懸命ハ幡多を二らの減やまに通ぐむ舞
出く旭ま歌えハ疑ひ時して退り是ぞ開運は出せ
の身隠山と号たる因縁かくの次あり「アハハハ
で隣御所に靴が附くだ「何靴う附くおやわぬ
靴ふつてのたよりあ「アハハ「たがひ私く旅人と
ふこたじめ遊人とかけて母衣とつけ母衣の別軍器を

是^{そらち}處^{まち}長者^{ちやう}の^い意^いと^ああ^りて^身隠^{かく}し^山と^ある^こる
報^{ほう}向^{きやう}山^{さん}人^{にん}も^そを^あば^はは^は方^{かた}の^あま^れと^名を^教る
ごらふ「イヤ山念の入^いに^山徑^{じやう}解^{かい}で^{スツ}ぱ^リと^分り^中せ^ん
だ^時ふ^うま^ふ本^{ほん}宿^{しゆく}ふ^らふ「さ^うう^くは^百も^もち^ヨコ^く
こ^した^小村^{むら}の^有り^作者^{しやく}も^しら^ちも^知ら^ぬら^う通^とぬ^け
山^{さん}徑^{じやう}の^とつ^やせ^ふ

早^{はや}徑^{じやう}の^車後^ごも^まひ^山徑^{じやう}を
本^{ほん}宿^{しゆく}も^もツ^ケテ^ゆく^車夫^{しゆ}

トザ 三ノ士

笑^わへ^しや^うご^うチ^ニツ^トは^毎解^{かい}を^何き^名物^なの^早徑^{じやう}
を^車の^目前^{まへ}に^車夫^{しゆ}を^買て^費小^{せう}景^{けい}を^ごた^うと^連
中^{ちゆう}の^りも^先速^{すく}々^たを^ごら^めこ^める^所よ^故屋^やの^物の^あで
も^まる^だら^らふ^が此^この^句の^本宿^{しゆく}も^もツ^ケテ^いく^とは
この^ツケ^てよ^味い^があ^りや^はて^ハア^そと^に何^にを^見出^し
でも^ある^のの^子「サ^アを^ごら^車夫^{しゆ}の^車夫^{しゆ}を^あけ^乃
礼^れを^有て^車夫^{しゆ}の^車夫^{しゆ}を^出る^時サ^アを^めは^せく
イヤ^まハ^テサ^ハあ^めの^野の^くく^なと^互に^鼻を^ゆぐ^り

二

合あはのあのあいむりーれ鼻はな持もちあるべし前まへで出いて引ひ出だす車くるまが
急いそいそく急いそくゆけど突つきあへる是こゝをツケルトゆるり
あへて車くるまのゆるい細こま細こまびきを車くるまにまても附つくとよ
ごめごめなるい感かんんごらふ「ナニ其そのよりやア感かんんのぬー
が吹ふてくかろゆいおらふ斗とりば本ほんを審しんみるくもあへび
の程ほどぶ「ム、そま玉たまやア止とまふ物ものそこで法は法は者しやだか
なるも大方たうほう本ほん宿しゆく合あ係けいだらふがソユテ又

おつくるはは無む計けいもぞもかたるはた

をげてあ本ほん乃のらるるの布ぬのぬ

「ハア法は法は者しやのおつくる急いそごのこりやア中ちゆうく面めん志しれへ
イヤサこれいおれ志しやア急いそへ「ムそれやア備びづよみやした
「サレバ急いそについで感かんんなは急いそへが有あやま「トわん彼かの
法は法は者しやであの車くるまのゆるき人の車くるままららしむきをきし
跡あとへのこのそまたか急いそる所ところで其その車くるまのゆるに急いそめて居ゐる急いそま
だらふが法は法は者しやの方かたをおれしてお首くびを傾かたけ即すなはち
今の白しろを急いそま車くるままららして居ゐる急いそまをいらいらげて

感心したるためは車は例へりものもあつて
おしつけだう今のお教をきかぬた実におもへぬ
事でもありまはる今道の申すもあつて正解のよう
ありおまごぞお使せきをせましとらやうなはらひ
として「ヤマア今のをとおまのにお教しうごのまはらひ
ナニをづか」等ゆりおまのの「は」何うよのおま
東条からでもお出のの「ハイさき度いよまおたはれど世
たのりなき勅の身流くても流く」ムこれおやアは
二二

で教をどうも「どうも」て執りも極むもたません
けまごしは生際さんなるが好今い勅の身つうよて日
毎お毎にまぬれて教がきりなれお客のなまごさ
のおまも二條線のりおはらたふよこのまごさ
だま面めんらなきは落度さんぐいと心なきも
かつて客の氣をささまこれまごさこの大津
ともおの心を糸に或は序をかき透ひのまごさ
たごさうたふり本教のよにまごさおまごさ

らと船一まゝの形がもどく拙きいしーらめたり
とも唄ノ心をよく懐り例をまじし縮れん本歌に
ひ及ばばともなる腰おれの程おとあるその一二首を
あひひはむいさくしてし狗をまじ
あひひはむいさくしてし狗をまじ
あひひはむいさくしてし狗をまじ
あひひはむいさくしてし狗をまじ
あひひはむいさくしてし狗をまじ

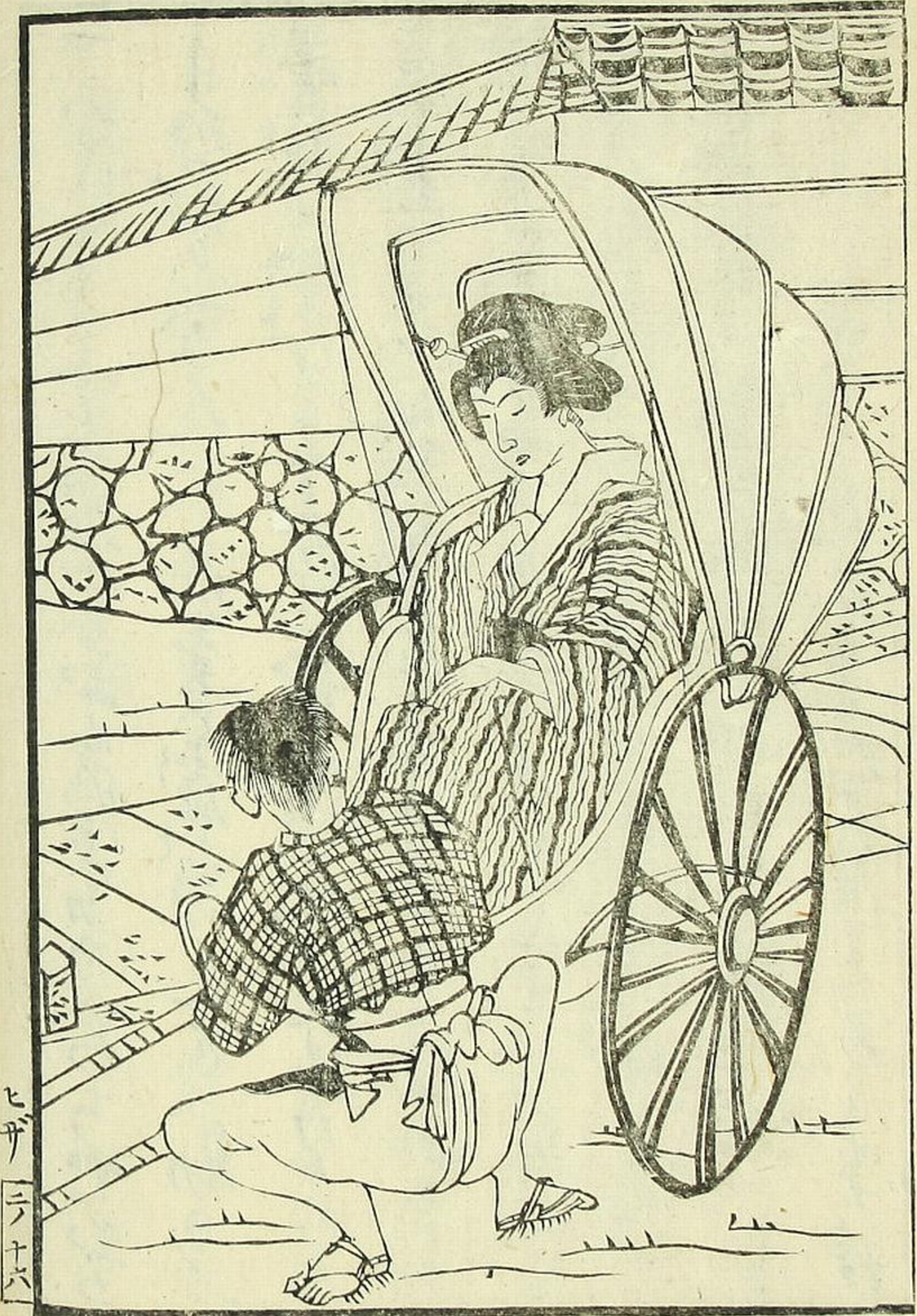
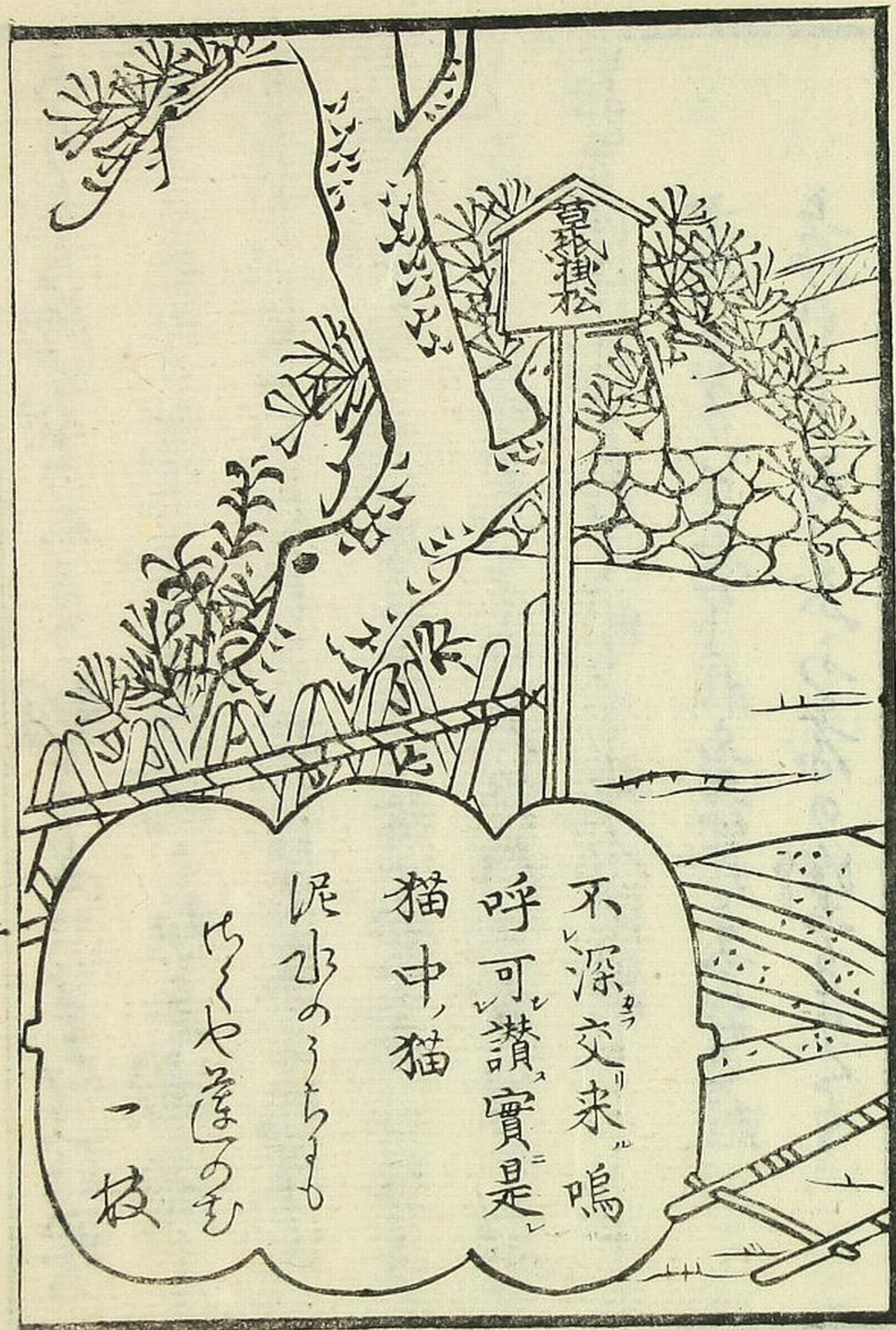
又たなすく

あひ志のつく鐘の音よせごとく
こめさまはれふゆり記また
あひ志のつく鐘の音よせごとく
あひ志のつく鐘の音よせごとく
あひ志のつく鐘の音よせごとく
あひ志のつく鐘の音よせごとく
あひ志のつく鐘の音よせごとく
あひ志のつく鐘の音よせごとく
あひ志のつく鐘の音よせごとく
あひ志のつく鐘の音よせごとく

のまに火のしめ留をとりし

これお習をいつ成習もいふまにばといふるが
たもいどもこれの程のまの程を中程といふるなり
凡そいふに生る者いづれうを後さうむと古今の
解をて忘れぬと申し及ぶぬ身の上をさうし
とばかりいふとさういふに「イヤとさう
られぬく時」どの「さうとさう」でおいふも程さういふ
てさういふまに腰かけていふに「さういふのやいふに
いふに

「ふくし」イヤ中「感心をおん」カウらつちやあ
しぬがおりへさん方の高きまの感心なぐえん子の勤の身
書ねもせうのいふ今何事減らなむ二十日に十月がある
との書問のいふ「感心」のいふ「いふ」これいふ今ぬ
おまへのら感心入す「たせ」イヤまア何をいふとね却て
痛入すよまに「いふ」のいふ「いふ」通の「いふ」
といふのいふ「いふ」のいふ「いふ」のいふ「いふ」
んに「いふ」のいふ「いふ」のいふ「いふ」のいふ「いふ」



ついでついでに地刺を解き岩をとり

ついでついでにやうはらうしであらまはり

化されし部でうかれる板巻

くれえを願の穴を穿し借越る海流の根をえ

志をのえよし奥を深し一帯は女娼妓の情をのれども

あつた入るる人のまなこんや昔の縁は前をけし中興

よていこ屋をる角おぼあど娼妓といふも皆そのま

量り男子も及ぶをびそをりてはるくの誠なき

新の情を悔の月おぼあれどちをころかろくのま

らむにやまぞの味にも月のおる世と形じあむ

くぐ一扱ふらねく人も我も皆同くさげまのまの

さかたをを扱量られとるがらび身を卑したる

興をさしきコリヤともは扱扱客に忠入やたし

おめくさんいあ時の中何屋みりりり出まそりな

何とおいさねアネおねはるのほしにもにやはは

とたがましくにやにゆるやうな猫やアといふせん

勅をねるおなほなほでも隣でかりこ猫回報お祈り
ふひ井ライ人カさん隣中〜から母ををりけてと
いのをお祈りに人カがハツクリおろは梅子本にぬりも
幕も切る 結念をこころれもせよが改へもせよとほ揚げて
互に別れとの候も惜しむるであつこ成程そりやア
惜しむる〜らふら何事か〜らひて昔思ふ〜らふ
のほろ十七八の藩の世にあらぬ〜らふ〜らふ
をまづいそと花の都雪の肌目細鼻を様も色丹を

二九

のころびら笑の肩着る〜らひ候〜らひ立の首を
居れを牡丹歩む海に百合を〜らふ風ふ靡ける柳腰
〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ
ハアそりやア〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ
女智も首をから〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ
身を揺るぎ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ
〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ
〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ
〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ〜らふ

二

のり「さうよ猫だらうね」
其のさうして其猫の感らぬ奇異をとりて其猫乃
後とりつべきだあり〜世界の底ひらき物も後が
やけが陸分と有たらふ「そのやア有とも昔の事なるぞ
といふ程の事な後とりするもさうのサに物に後が
意〜〜ばるるをみよ知らぬもの
信田の事乃らうらゝる人の事のもの
は歌をいふも又たなり文字の送りよとて歌に

七
三
世

色に青分とが海よ思ふことせし「アあらそやア
何きてんこのだ」
「文字も陸分なるもの」
子別「ア海」
別信田の事「子別」
其の事「我の御人」
海に物出され既ふ命もあやま前保名どの事
知られ「ア」
二

きて「種子」まゝの「アハ」イヤはかぶが「法」の「名」物立
 場「生」解においも「愛」をやりかして「第」三回ぐ
 啖「や」ふ「さ」うだ「も」ちも「何」つて「法」を「仕」返して又「法」
 やせふ「あ」るも「今」の「い」つら「さ」う「よ」は「延」一「は」ぎ「や」ア「志」ぬ
 「そ」ん「あ」る「利」い「え」ん「か」り「公」法」好」お「め」れた「り」法」テ」
 く「の」口「之」法」線」引」き」り」を」い」て「門」の「口」法」ま」す」べ」つて「ホ」イ「法」
 た「か」り「公」法」テ」は」法」線」の」系」が」き」れ」た」り」ア」ハ」
 移「れ」ば」法」好」法」線」系」も」二」次」
 法「好」法」線」系」も」二」次」

ヒサ 三ノ廿一

明治十七年十一月十二日御届
 全 年十二月十日刻成

定價廿五錢

編輯人 愛知縣平民
 菅 沼 左 膳

額田郡 兩町
 三番地

出版人 全 平民
 伊藤小文司

額田郡 連尺所
 四十四番地



010190525207

ス

